

令和3年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 定 通	<input checked="" type="checkbox"/> 分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---------------------------------------

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (1)国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実させ、本校の教育目標の達成を目指す。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	B			
【短期(本年度)経営目標】 IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価(生徒・保護者・教職員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	2.9	3.0	3.1	A
【短期(本年度)経営目標】 日本の学習指導要領とIB プログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、PLチームの示す方向性を基に、IB 推進チームと教科会の間でミドルアップダウンを行うなどして、研究推進の校内組織の活性化が図られている。				
【評価指標】 教職員対象アンケート	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	—	88.7%	B
【短期(本年度)経営目標】 校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IB プログラムの充実が図られている。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた評価(校外関係者からのフィードバックを対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	2.8	—	—

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)経営目標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校完成年度として、国際バカロレア教育を用いた教育活動の充実を図ることができた。特に、本校のミッションと、IB のミッションを照らし合わせ、学校コミュニティーの構成員である生徒、保護者、教職員が具体的な行動を起こそうとしている点に関しては、大きな進歩があったと実感している。 ・令和4年度の高等学校開校準備を通して、改めて本校の目指すべき姿を再確認するとともに、課題についても共有しながら開校準備を進めることができています。
		課題	令和4年度からMYPに加えDPも開始することから、その実施体制をより頑固なものとしていく必要がある。特に、留学生の入学に伴い、保護者の文化背景も多様化し、加えて教職員も多様化していくため、円滑なコミュニケーションを図り、学校の目指す方向性に対する共通理解を図る必要がある。
	短期(本年度)経営目標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ミッション・ビジョン・バリュー(MVV)を意識した授業、学級活動、寮での活動、生徒会活動が特に活性化したことから、生徒にもMVV に対する意識が浸透していった。 ・MYP 推進チームとともに、DP 準備チームを立ち上げるなどし、令和4年度から実施する DP を見据えた校内組織の活性化を図ることができた。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルス感染拡大の影響を受け、校外の人的・物的資源を活用したプログラムの充実を図ることは、困難であった。 ・中学校3年生に対する研修旅行や中学校1年生対象のインターンシップが実施できなかったことは、教育活動に大きな影響があった。一方で、オンラインプログラム等に参加する機会を提供するなど、コロナ禍でもできる活動を取り入れながら取組を広げている。
今後の改善方策		令和4年度は、高等学校開校及びDPの開始に伴い、留学生の受入れ、生徒・保護者・教職員の多様化と様々な変化が起こりうる。その中で、中学校開校3年間で培ってきた本校のMVV をさらに浸透させて教育活動に取り組むとともに、さらなるプログラムの発展及び生徒の進路実現に向け、校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施に具体的に取り組んでいく。	
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策		学校関係者評価において、本校の取組の発信の必要性について、助言をいただいた。そのことを踏まえ、HP や SNS 等における本校の取組の発信を充実させるとともに、積極的に授業公開を行うことで本校の取組を発信し、そこで得たフィードバックをもとに、さらに探究的な授業づくりに取り組んでいく。	

令和3年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全・定・通	本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	-----

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (2)教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	A			
【短期(本年度)経営目標】 授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価(生徒・教職員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	平均値3.0	3.2	A
【短期(本年度)経営目標】 生徒が実社会の正解が存在しない問いに向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、3年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	平均値3.0	3.0	B
【短期(本年度)経営目標】 教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくりを行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	平均値3.0	3.2	A

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)経営目標	成果	Bのフレームワークのうち、特にATLに着目した授業改善を行うことで、教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びの実現に取り組むことができた。また、教職員だけでなく、生徒自身もATLの発達を意識しながら学習活動や日々の生活を送ることができた。
		課題	上半期を終えた時点の生徒の振り返りを通じて、多岐にわたるATLの全てに取り組むのではなく、一部に焦点化して取り組むことがATLスキルの発展に効果的であることが分かった。下半期からは、学年ごとにATLを焦点化して取り組んだ。令和4年度もATLスキルの一層の向上に向け、教科や学年の連携を図る必要がある。
	短期(本年度)経営目標	成果	学年ごとに焦点化して取り組むATLを明確に生徒に示すことで、以前よりも生徒にとって理解しやすいものとして取組を行うことができた。3年生はパーソナル・プロジェクトに向けて、ATLを特定する機会が特に多くあったことから、ATLスキルを意識した学習を生徒自身が主体的に行う場面が見られるようになった。
		課題	単元の目標とATLスキルの発展に関する目標の関係性を明確にして、単元の計画・実施をしていくことについては、教員間での理解に差がある。また、生徒自身がATLスキルを発揮している場面において、その姿を適切に見取り、評価し、積極的なフィードバックを行っていくことについて、今後さらに取り組んでいく必要がある。
今後の改善方針			・次年度は、MYPの集大成としてのパーソナル・プロジェクトに1期生が取り組むため、引き続きATLをはじめとしたBのフレームワークを用いた教科横断的なアプローチを行いたい。特に、生徒が主体的に自分の目標を設定し、取組の計画をし、実施し、評価できるような資質を育てていく。 ・また、教科横断的な取組の中でも、特に言語の発達に関する取組を行っていく。BDPでフルディプロマを目指す上では、2科目以上を英語で履修する必要があるため、日本人の生徒にとって、英語力の向上は必要不可欠となる。さらに、留学生を迎え、言語背景がより多様となる中で、留学生の日本語及び英語の言語力の向上、さらには母語の維持・向上にも組織的に取り組んでいきたい。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針			学校関係者評価において、留学生のサポート体制を充実させるよう、助言をいただいた。そのことも踏まえ、留学生の言語能力の向上に努めるとともに、ATLスキルにある、情動スキルや自己管理スキルの向上にも取り組んでいく。

令和3年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (3)寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	A			
【短期(本年度)経営目標】 集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成者であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	85%	92%	A
【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	82%	96%	A
【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	82%	84%	A

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)経営目標	成果	生徒は、主体的・自治的な活動を通して、一人一人が役割と責任を持ち、学校や寮内の行事の企画・運営、課題の発見とその解決をすることで、仲間と同じ目標に向かって、協働する力やコミュニケーション力等を発揮し、伸ばすことができた。
		課題	・生徒の主体的・自治的な活動を促進しながら学習や生活をまるごと指導・支援していく際には、教職員の更なる意識統一と、専門的な知見が必要となる。 ・多様な文化背景を有する生徒を迎え、一人一人が尊重される学校文化を構築していくためには、教職員集団としての資質・能力を磨くとともに、生徒の可能性を伸ばしていくことのできる環境の整備や活動の計画を図る必要がある。
	短期(本年度)経営目標	成果	・生徒一人一人にとって、寮生活を通して、絆づくりや居場所づくりにつながるよう自治的な活動の一層の充実を図った。このことから、生徒の主体的・自治的な活動が活性化し、アンケートの結果においても肯定的評価が9月と比べて14ポイント上昇し、同じ目標に向かって協働したり、円滑にコミュニケーションを図りながら、協力したりする機会を増やすことができた。 ・生徒が主体となって寮則の改訂を行うことで、寮におけるルールやマナーを自分ごととして捉えることができた。さらに、食育や委員会の取組により、残食量の減少といった生徒の意識変化が見て取れた。
		課題	・普段の寮生活や寮行事において、仲間同士でコミュニケーションを図り、協力し合うことはできている一方で、寮生活をよりよいものにするための活動に積極的に貢献することや、他者への働きかけ、関わり合いに対する難しさを抱いている生徒が見られる。そのため、集団への指導とともに、個への支援を積極的に行う必要がある。 ・食事及び、食品ロスや食事に関わる人への興味・関心の低さと食事の好き嫌いに相関関係が見られ、食事に対する興味関心の向上の必要性がある。
今後の改善方策		・寮内における中学校及び、高等学校のより組織的な自治的活動の充実と相互の寮が関わる場や機会を設けることで、生徒の積極的な取組を促進できるような体制を整えとともに、生徒同士が円滑にコミュニケーションを図る機会の充実や、他者への働きかけや関わり合いに困難を抱えている生徒が自己肯定感を持ち、他者への働きかけや関わるような支援体制を充実する。 ・本校の生徒については、他校と比較して運動量(通学距離や部活動)が少ないことから、推定エネルギー必要量の設定の見直しの必要性も考えられる一方で、休日の過ごし方がインターネットやスマホでのゲームなどが多いことから運動量を増加させるような活動の充実を図ることなど、基本的な生活習慣の確立や改善に向けて、「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活を実現するための支援の充実を図る。	
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策		引き続き、生徒の健全な生活を支援していくとともに、自治的な活動を促していく。将来のリーダーとしての資質・能力の育成に努めるとともに、留学生を含めたインクルーシブな関係の構築に努めていく。	

令和3年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。				
【評価指標】 業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
	91.2%	目標値	実績値	
91.2% 95% 92.9% B				
【短期(本年度)経営目標】 教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。				
【評価指標】 一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	前年度 現状値	本年度		評価
	88%	目標値	実績値	
88% 100% 81.3% C				
【短期(本年度)経営目標】 教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。				
【評価指標】 学年・分掌における研修の実施合計回数	前年度 現状値	本年度		評価
	—	目標値	実績値	
— 2回 14回 A				

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)経営目標	成果	
		課題	
	短期(本年度)経営目標	成果	評価指標「業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合」、及び「一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合」については、目標値には到達してはいないが、昨年度と比較して、業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合は微増した。評価指標「学年・分掌における研修の実施合計回数」については、学年・分掌における研修の実施合計回数からも分かるように、分掌や学年での働き方改革や業務改善に向けた意識が高まっており、日頃からの声掛けや業務分担等の行動にも変化が見られるようになった。
		課題	・特に個別の生徒対応や保護者との連携の業務については、特定の職員に業務が偏ることがないよう、担当者を中心にした情報共有を一層図りながら組織的に進める必要がある。 ・中学校・高等学校の入学選抜や広報活動の運営の進め方について改善すべき点を洗い出し、より効率的で効果的な業務分担や遂行の方法を検討していく必要がある。また、令和4年度から高等学校が開校し、完成年度まで、留学生を含め生徒・教職員が増加し、業務内容が複雑化、高度化することから、意図的・計画的に準備の取組を進めていく必要がある。
今後の改善方針	特定の教員に業務が偏ることがないように主任等が実態把握し、年度途中でも役割分担を変更するなどして、業務の標準化に努めていくとともに、スクラップアンドビルドの視点から、業務内容を精査していく。		
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針	計画的な取組を継続し、引き続き業務改善に努めるとともに、全職員で「働き方改革」に関する意識を高め、業務遂行にあたる。		